

砺波市内の小学校の移り変わり

「ぼくたちの村に学校があった」

昭和・平成編



展示開催のお知らせ

期間
平成24年
10月2日(火)から
11月25日(日)まで

開館時間
午前9時～午後5時

休館日
毎週月曜日、第3日曜日

入館料 無料

はじめに
今年の郷土先人展は、昨年引き続き、「砺波市内にある小学校の移り変わり」というテーマで、昭和と平成にスポットを当てた展示をいたします。

大正デモクラシーの影響を受けた昭和初期の自由教育も、昭和10年代にははだいに戦争色を帯びてきました。尋常小学校から国民学校に制度が変わる頃には、都会から戦火を避けて東京の児童たちが砺波の寺へ疎開してきました。

終戦になり、GHQの占領下で教育基本法が制定され、現在も続く6・3・3制の教育制度が始まりました。

戦後のベビーブームが落ち着くと、校舎の老朽化や児童数の減少などから学校の統廃合が問題になりました。昭和22年で分校を含めて24校あった小学校は、現在の8校になりました。

時代とともに、学び舎の姿も変わりました。環境に配慮した学校で、陽ざしが差し込む明るくてあたたかい教室の中で子どもたちは元気に学んでいます。

平成24年 秋
砺波郷土資料館長

高波小学校
南般若小学校
柳瀬小学校
東般若小学校
若林小学校
林小学校
庄下小学校
若林小学校
高波小学校
林小学校
油田小学校
南般若小学校
柳瀬小学校
東般若小学校
梅檀野小学校
般若小学校
般若小学校S26落成式
鷹栖小学校
出町小学校
庄下小学校
太田小学校
梅檀野小学校
梅檀山・東別所分校
梅檀山小学校
梅檀山・原野分校
梅檀山・湯山分校
東山見小学校
東山見・湯山分校
出町小学校
東野尻小学校
五鹿屋小学校
種田小学校
青島小学校
東山見小学校
雄神小学校 S30
種田小学校 S26落成式
青島小学校 S30
太田小学校S49入学式
中野小学校
東山見小学校 S25

砺波市立 砺波郷土資料館

〒939-1382砺波市花園町1-78 TEL:0763(32)2339 Email:shiryokan@city.tonami.lg.jp

主催:砺波郷土資料館 / 砺波市文化協会

砺波市内の小学校の移り変わり

昭和初期―戦前

大正デモクラシー
民主主義的な社会風潮の影響を受けて、教育でも、児童が自発的・計画的に学習するような児童中心主義の風潮がおこりました。

昭和に入ると、多くの学校に建てられた二宮金次郎像を見ながら報徳精神のもと、子どもたちは、貧しくもよく働き、寸暇を惜しんで勉強に励みました。
学校では祝祭日の特別な儀式があり、四大節は特に重要な式典でした。

式典には村長や村議会議長などが招かれて参列しました。生徒が整列すると、奉安殿に安置されている御真影が講堂の正面に掛けられ、一同深々と礼をしました。校長先生は白い手袋をして、巻物を開いて『朕惟ふに…』と教育勅語を読み上げました。その間、生徒たちは頭を下げたまま、微動だにせず、じっとその言葉を聞いていました。



奉安殿の前での式典

戦中・学童疎開

昭和16年4月1日、国民学校が発足しました。国民学校の教育は、皇国的教化、政治と教育の一体が強調され、国家と戦争の遂行が最優先されました。知識を修得するよりも、心身を鍛えて立派にすることが重視され、学校は鍛錬の場へと変わっていきました。

戦況が一層激化した昭和19年、政府は大都市の国民学校児童をより安全な地域へ一時的に移住させる学童疎開を行いました。

富山県には東京の渋谷区、大森区、蒲田区、荏原区が割り当てられ、砺波では渋谷区と大森区の児童を受け入れました。

児童たちは、砺波各地の寺に寄宿し、そこから近くの国民学校へ通いました。遠く親元を離れて過ごす寂しさから、泣き出す子や慣れない生活から病気になる子もいました。



疎開先のお寺での子どもたち

終戦 GHQ

連合国軍最高司令部(通称GHQ)は、占領政策の一環として日本の教育民主化に深い関心を寄せました。教育や報道、宗教などについて指導・監督を行なう民間情報教育局(通称CIE)という部局を置き、戦時教育の払拭を指示しました。次々と教育に関する指令が出されると、現場の学校では、つい昨日まで大切にしていたものを処分しなくてはならない無情を感じつつも、涙をのんで処理しました。

GHQ占領下の昭和22年、政府は、教育基本法と学校教育法を公布しました。

この教育基本法は、民主的で文化的な国家を建て、世界の平和に貢献するための教育を目的として示した、根本的な教育の法律です。

学校教育法は学校教育の制度や運営を規定するもので、義務教育の6・3制が確立されました。

現在の小学校

昭和60年に最後の統廃合を終え、砺波市の統廃合計画は一段落しました。そして平成11年に最後の分校が閉校になりました。また、平成16年に砺波市と庄川町が合併して、現在の砺波市立小学校8校の体制が整いました。

現在は、昭和57年以前の建物への耐震化工事を順次進めており、8割ほど進みました。新しく増改築された学校には、教室ほどの広さのオープンスペース(廊下)やコンピュータが20台並んだパソコンルーム、地域の人に活用してもらう地域開放ホール(兼ランチルーム)などがあります。

また、太陽光パネルで発電し、校内の蛍光灯の電気として使用したり、雨水を溜めてトイレの流し水として利用したりするなどエコな学校としての設備も整っています。

平成14年に学校週5日制になって以来、子どもの様々な問題に対応する体制づくりを進めながら、情報、防災、環境、地域開放に配慮した学校へと姿を変えてつづいています。

ベビーブーム 統廃合

戦争が終わり、兵士が帰還・復員したことによって、昭和22年から24年頃にかけて出生数が急激に増えました。これが、戦後の第一次ベビーブームです。

この間、日本の出生数は、年間250万人を超え、富山県では、昭和22年に4万人を超えました。

昭和30年代後半になると、ベビーブームによる児童数増加も一段落し、数年後には児童数、学級数が次第に減少することが予測されました。また、木造校舎の老朽化や教育費増大などが問題になったことから、学校の整備、統合計画が持ちあがりま

した。旧砺波市では、昭和35年の時点で15校あった小学校を10年計画で、8または9校に統合する計画が進められました。
しかし、地域住民にとって長く親しんだ地元校を廃校にすることは受け入れ難く、統廃合を推進する行政とそれに反対する住民との間で、対立運動が起こる地域もありました。



昭和30年代の運動会



昭和30年の臨海学校



昭和30年代の校内の様子

明るいランチルームで今日もおいしい給食

屋上に取り付けられたソーラーパネル

広い廊下 集会もできるオープンスペース

昭和50年代の授業風景

昭和30年代 小学校の廊下

戦時中のさつまいもで食料増産

